

第40話

前回の
復習

FD担当者のID的基礎とは何か

京都の冬の物語

それは、2009年12月19日京都外国語大学での出来事。
「FDの組織化・大学の組織改革」をテーマにした研究会でした。

JSETの

1. 問題提起: FD をID とみなせないか: 両者の類似点
2. 観察: ID からみるとFDには設計がなく実施に偏っている!
 - 愛媛大学「教育企画室」はすごく活発: カナダ人講演記録などを公開
 - 国立教育政策研の「FD マップ」は3レベル×4段階での整理が見事
3. 主張: FD 担当者に役立つID 的基礎がある
 - まずは、役立つティーチングチップス: 先人の知恵袋
 - 次に、理論的根拠: 効果と説得性が高まる
 - 最後に、学習者向けツールへの転用: 大学とIDの親和性
4. 提案: FD 担当者の職能向上にID 専門家認定制度を使う
 - ibstpi「インストラクタ」・eLP「ラーニングデザイナー」・GSISもあるよ

IDポータルにて原稿公開中: <http://www2.gsis.kumamoto-u.ac.jp/~idportal/wp-content/uploads/a91219jsetkufs.pdf>

©2010 鈴木克明

eラーニング推進機構eラーニング授業設計支援室

ランチョンセミナー



FD をID とみなせないか 両者の類似点

- 教育活動を間接的に支える支援者
 - 直接手を出せない. ToT (Trainer of Trainer)
- SMEと連携し幅広い内容領域の教育に関与
- その都度SMEからヒアリング
 - 教育内容を素人ながらに(あるいは, 素人の利点を生かして学生の立場に身を置きながら)把握
- 最適解を提案
 - 学習者の特性と教育内容の特徴と教育環境の制約条件を考慮
- 重層的に取り組むべき課題
 - 毎時間の授業・個別の科目からカリキュラム, 組織のレベルまで



知識・技能・態度に
分けて書いてある！

設計がなく実施に偏っている

表1 FD担当者に求められる専門性(愛媛大学)

<知識>

具体的に何を指しているのかは不明

- ①学習心理学, ②成人教育論, ③インストラクショナルデザイン(教育工学), ④組織論, ⑤調査論, ⑥高等教育学

<技能>

授業設計スキル(ID技法)はない！

- ①インストラクショナルスキル(教授技法), ②コンサルティングスキル, ③ファシリテーションスキル(会議等での議事進行, 議論促進技法), ④教材開発力

<態度>

- ①ニート(身なりや言動のきちんとさ, 丁寧さ), ②誠実さ, ③前向きさ, ④社交性, ⑤ストレス耐性

出典:愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室(2008)「FD担当者必携マニュアル 第1巻 改訂版 ~FDプログラムの開発・実践・評価~」p.13



カナダ人講演記録

「ワークショップでは授業のデザインと教授実践の 2点に焦点があてられている」

- 一つ目の授業デザインが網羅している事柄としては、コース内容の決定, 目的・目標の明示, 教育方略の選択と適用, それから評価方法の選択と適用があげられます.
- 二つ目の教授活動については, 教育方略の実施, それからプレゼンテーションのテクニックの実践, それからビジュアル教材の開発と使用, それから他の学習者と交流を持つ, という点が網羅されています.

出典: 愛媛大学(2009)「FD担当者必携マニュアル 第4巻~コースデザイン・教授法ワークショップとFDネットワーク~」, p.5

http://web.opar.ehime-u.ac.jp/pdf/fd_hikkei_4.pdf

FD マップ(国立教育政策研)

■目次

- 序文
- 関係の経緯
- 関係の方針
- 本書の利用方法
- FDマップの利用ガイドライン
- FDマップ
 - ミクロレベル
 - ミドルレベル
 - マクロレベル
- 用語解説

平成21年(2009年)3月
国立教育政策研究所「FD研究会編

フェーズ	レベル	ミクロ <u>個々の教員</u>			ミドル <u>教務委員</u>			マクロ <u>管理者</u>		
		目標	方法	評価	目標	方法	評価	目標	方法	評価
I. 導入 (気づく・わかる)										
II. 基本 (実践できる)										
III. 応用 (開発・報告できる)										
IV. 支援 (教えられる)										

全レベルで示されている目標
を達成した経験が求められる

FD担当者の主たる業務？



① 「ティーチングティップス」

名古屋大学高等教育開発センター

- 2000年にWeb公開、書籍化＋バージョンアップも重ねて成長を続けている (<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>)
- 授業の基本＝コースデザイン
- 実施段階＋設計段階のティップスも視野に
- 初任教員の授業日誌を題材にした物語性
- この資料自身にもIDのノウハウが応用されている
- IDの考え方を平易に解説した大学教員向けの入門書としての利用価値は高い。

ARCSモデルに基づくヒント集(教材づくり編)
■関連性<R-1:親しみやすさ(Familiarity)>

自分の味付けにさせる

- 対象者が関心のある、あるいは得意な分野から例を取り上げる
- 身近な例やイラストなどで、具体性を高める
- 説明を自分なりの言葉で(つまりどういうことか)まとめて書き込むコーナーをつくる
- 今までに勉強したことや前提技能と教材の内容がどうつながるかを説明する
- 新しく習うことに対して、それは〇〇のようなものという比喻や「たとえ話」を使う



②理論的根拠としてのIDの知見

- FDの対象となる教員には「ティーチングティップス」を勧める一方で、FD担当者としては更に自らの支援の理論的根拠をIDの知見に求めることが有用ではないか？
- 教員を支援する際に提案する改善策の**有効性**をより高めるとともに、改善策の理論的根拠を明らかにすることで**説得性**を高める効果を期待してのこと



ARCSモデルの理論的基盤

注意

関連性

自信

満足感

欲求の階層構造
(マズロー)

達成動機
(アトキンソン)

強化価値
(ロッター)

好奇心喚起
(バーライン)

不安感(ミラー)

心理学理論等を実践者
向けにまとめた

期待×価値理論

内発的vs外発的動機づけ

統制の位置
(ロッター)

効力感
(バンデューラ)

自己決定感
(ドジャーム)

獲得された無力感
(セリグマン)

原因帰属(ワイナー)



③学習者のためのツールとして転用 スタディスキルの向上に役立つ

- もし大学で「本を読んで自分で勉強を進められる人」を育てたいのであれば、何でも懇切丁寧に教員が提供するのではなく、徐々にでも学生に期待する役割を増やす工夫も必要
- ID技法を媒介として教育場面における教員と学生の役割分担と責任範囲を設計できることも、FD担当者がIDを学ぶもう一つのメリットとして意識しても良いのではないだろうか？

ARCSモデルに基づくヒント集の比較

■ 関連性 < R-1: 親しみやすさ (Familiarity) >

教材づくり編 自分の味付けにさせる

- 対象者が関心のある、あるいは得意な分野から例を取り上げる
- 身近な例やイラストなどで、具体性を高める
- 説明を自分なりの言葉で(つまりどういうことか)まとめて書き込むコーナーをつくる
- 今までに勉強したことや前提技能と教材の内容がどうつながるかを説明する
- 新しく習うことに対して、それは〇〇のようなものという比喩や「たとえ話」を使う

出典: 鈴木克明(2002)『教材設計マニュアル』北大路書房

学習者編 自分の味付けにする

- 自分に関心がある、得意な分野にあてはめて、わかりやすい例を考えてみる
- 説明を自分なりの言葉で(つまりどういうことか)言い換えてみる
- 今までに勉強したことや知っていることとどうつながるかをチェックする
- 新しく習うことに対して、それは〇〇のようなものという比喩や「たとえ話」を考えてみる

出典: 鈴木克明(1995)『放送利用からの授業デザイナー入門〜若い先生へのメッセージ〜』日本放送教育協会、第5章



4. FD担当者の職能とID専門家認定制度

- ① ID専門家の職能基準（第三版）ibstpi 2000年
- ② eLP資格認定制度（日本イーラーニングコンソシアム）eラーニング専門家7職種 2008年
- ③ 熊本大学大学院教授システム学専攻で学ぶ

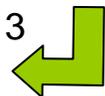
FD担当者のキャリアパスを考える際に、ID専門家の資格取得を視野に入れるのはどうだろうか？





招待講演「学習力アップのためのeラーニングデザイン」@Bbカンファレンス2009in大阪(第39話)

- eラーニングの導入がやりっぱなしの教育を防ぐ
- 授業改善をどう実現するか？(気持ちとスキル+構造化+サポート)
- 授業改善の目的は教育効果の向上だけではない: ID の3つのゴール
- IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図(レイヤーモデル含む)
- eラーニングをここから始めよう(ネタ探し+リンク集+クイズ+BBS+PF)
- 授業設計論(ID: Instructional Design)を援用する
ARCSモデル(教材づくり編* + 学習者編**) + 9教授事象
 - * <主張: 関心・意欲・態度のなさは学生の責任ではない。授業を魅力的にしましょう! >
 - ** <主張: 学生をいつまでも甘やかしてはいけない。やる気を自分でコントロールさせよう! >
- 大学教育の今後に向けて—IDとeラーニングの役割—





■ 大学教育の今後に向けて —ID とe ラーニングの役割—

1. e ラーニングをどう使うかを考えること通して大学組織の特徴や教育機能を棚卸しする
2. 大学職員がID を学び、教員(内容専門家=SME)と協働で大学運営にあたる教育専門職になる
3. 大学教員がID を学び、教育工学を研究領域(所属学会)に加える
4. 大学生にスタディスキルとしてID を学ばせて「自分で学べる人」にして卒業させる
5. 関係者全員がICT 環境を活用して「いつでも学んでいる人」でいられるようなe ラーニング環境を構築・提供する



鈴木克明(2009.12) ファカルティ・ディベロッパーのID的基礎とは何か 日本教育工学会研究会(FDの組織化・大学の組織改革／一般) 京都外国語大学

- 詳しくはまた機会があればお話しします・・・(ネタ温存)
- あらまし:大学の教育改善を組織的に進める専門職(ファカルティ・ディベロッパー)に必要な基礎としてインストラクショナルデザイン(ID)の何が不可欠かを考察する. 授業実施やカリキュラム改善の支援者として, 実施者(アクター)としての視点のみならず設計者(デザイナー)の視点を持つことと, 経験知としてのノウハウのみならず学問的背景を説明できることが異分野の研究者を説得するために有用であることを主張した。

IDポータルにて情報公開中: <http://www2.gsis.kumamoto-u.ac.jp/~idportal/wp-content/uploads/a91219jsetkufs.pdf>

